2014年マイワシ

単位：数量，1,000トン、価格，円／kg

年	数量 生産	産地	輸入 ﾐｰﾙ	輸入 生冷	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 煮干	在庫	加工品生産 缶	身ｶｽ	塩蔵	煮干	塩干	消費支出 生(ｸﾞﾗﾑ)
25	218.4	161.5	194.8	2.7	54.8	0.1	6.3	2.1	13.9	4.4		1.3	24.1	15.6	737.0
26	201.5	113.9	248.3	2.8	13.8	0.0	6.1	2.2	10.5	4.3					688.0
%	92	71	127	102	25	18	97	106	75	98	－	0	0	0	93

年	価格 産地	輸入 ﾐｰﾙ	輸入 生冷	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 煮干	消費支出 生(円)
25	57	154	97	75	528	341	567	559
26	71	156	128	97	889	402	620	589
%	125	101	132	129	168	118	109	105

海域	25	26	対比(%)
道東	18	39	221
三陸	15	14	94
常磐	67	48	72
九州	17	10	61
山陰	41	1	3
その他	11	10	91

MAX：S63年 4488千トン

漁獲量と資源

26年のマイワシの漁獲量は、20.2万トンで前年の21.8万トンを下回った。

道東漁場では、昨年に続きマイワシの漁獲がみられ、前年（17,676トン）を更に上回る38,938トンの水揚げ（釧路、広尾、八戸）をみた。一方、カタクチイワシは前年皆無であったがマイワシとの混じりで若干（12トン）漁獲された。北部太平洋海域のマイワシの漁獲は、三陸、常磐～房総海域での漁獲が何れも前年を下回った。また、山陰、九州でも、前年を大きく下回る水揚に終わった。

太平洋系群のマイワシの資源量は、1980年代の1000万トン以上の高い水準から、1990年代に減少し、2002年以降2007年まで10万トン台の低い水準で推移したが、2008年以降の比較的良好な加入により増加し、2013年は71.4万トンであった。同様に親魚量は2002年以降10万トンを下回る低い水準で推移したが、2012年には38.7万トンとBlimit以上に回復し、2013年は48.4万トンに増加した。現状の再生産関係では将来的に資源の現状維持～増加が見込まれる、とされている。

コホート解析の結果から、資源量は1970年代から増加し、1988年には1000万トンに達したと推定される。その後減少し、1995年に資源量は100万トンを下回り、2001年には1万トンを下回ったと推定される。2004年以降は増加し、2005年より再び1万トンを超え、2013年の資源量は25.2万トンと推定された。資源水準は中位、動向は増加傾向にある、とされている。

産地水揚量と価格

26年の水揚量は、11.4万トンで前年（16.2万トン）をかなり下回った。したがって価格は顕著な上昇となり、71円で前年（57円）をかなり上回った。

本年は、道東海域で17ヶ統のまき網船による操業となり、前年を大幅に上回る漁獲となった。北部太平洋海域での漁は、三陸沿岸、常磐・犬吠海域ともやや低調な漁模様となり、前年を下回った。なお、本年のミール相場は、上半期は、トン当たり16万から18万円で推移したが6月以降20万円を突破し、12月には28万円にまで高騰した。

道　東

本年は、昨年より14ヶ統多い17ヶ統の操業で8月18日から始まり10月19日まで続いた。合計38,938トンの漁獲となり、釧路、広尾、八戸に水揚げされた。本年は、大半が大羽・中羽の漁獲が多く、従来は全量ミール向けであったが、食用向けにも利用され、消費地市場（築地）では、高値で取引された。

三　陸

26年の三陸での漁況は、初漁期（北上期）の４，５月に若干漁がみられ、夏場にも低調で何れも前年を下回る漁獲に終わった。

三陸（単位：1000トン）			常磐（単位：1000トン）		山陰（単位：1000トン）		日本海北（単位：1000トン）	
月	25年	26年	25年	26年	25年	26年	25年	26年
1	1.3	1.3	0.7	6.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2	0.2	0.1	4.3	0.4	4.6	0.0	1.6	0.2
3	0.0	0.0	11.0	4.1	8.2	0.1	1.4	0.0
4	0.0	0.0	13.2	22.9	9.1	0.1	0.2	0.0
5	2.1	0.3	18.3	5.3	1.9	0.7	0.0	0.0
6	7.0	3.4	14.9	3.8	2.1	0.0	0.0	0.0
7	2.4	0.3	2.8	5.0	0.1	0.1	0.0	0.0
8	0.5	0.0	0.2	0.7	0.7	0.0	0.0	0.0
9	0.0	0.1	0.0	0.0	0.4	0.1	0.0	0.0
10	0.0	0.8	0.0	0.1	8.3	0.1	0.0	0.0
11	0.1	4.7	0.0	0.0	4.9	0.1	0.0	0.0
12	1.6	3.5	1.7	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0
計	15.3	14.5	67.1	48.3	40.7	1.3	3.2	0.2
MAX: S61年1097千トン			MAX: S58年822千トン		MAX: H元年713千トン		MAX: －	

しかし秋から冬場の南下期は昨年をやや上回る漁獲で次年度に期待をもたせた。なお道東海域からの搬入物が八戸港で8,935トン水揚げされた。

魚体は、周年を通じて2013年級群主体に漁獲された。

常　磐

26年の常磐での漁況は、原発による放射性物質漏れの影響もあって、福島沖での操業区域の制限が本年も続いた。初漁期の越冬群の漁獲が順調であったが、北上期においては前年をかなり下回った。また、後半の南下期も前年同様みるべき漁はなかった。その結果、前年を下回る結果に終わった。

魚体は、周年を通じて2013年級群主体に漁獲され、越冬、北上期は小中羽・中羽主体、南下期は中羽主体に漁獲された。

山　陰

26年の山陰での漁況は、前年まとまった漁獲があった3.4月にはほぼ皆無状況で、5月にややまとまった程度で、その後秋終盤にもまとまった漁獲はみられなかった。その結果、水揚量は昨年を大幅に下回った。

また本年のカタクチイワシは、前年以上に上半期の３，４月に山がみられ、下半期の漁が低調に推移したものの、水揚げは前年を上回った。

在　庫　量

本年の月平均在庫量は、1.1万トンとなり前年(1.4万トン)をかなり下回った。これは、輸出量の大幅減少も国内生産量の減少が大きく反映した結果である。平均在庫は1.1万トンと上半期の水揚げの停滞を反映し前年(1.4万トン)を下回った。

輸　出　入

本年の輸入ミールは、24.8万トンで前年（19.5万トン）をかなり上回った。

輸入ミールは21世紀に入って再度増加傾向を見せてきた。2001，2002年は40万トン台に輸入量も回復し、2006年も2002年以来の40万トン突破となったが、2007年以降市況の高騰やペルー沖のアンチョビーの不振もあって30万トン台前半の水準で推移し、昨年はついに20万トンを割る昭和年代末期の低水準となった。しかし本年はやや回復の兆しがみられ、前年を上回った。

また、平成７年頃から餌料不足により従来から外国(米国、メキシコ、オランダ)からの原魚輸入もみられていたが、現在では米国が主体になっている。本年は国内生産減少も輸入増加に繋がらず、米国からの搬入は1,026トンと引続きやや減少傾向がみられる。また、その他少ないながらもメキシコ（487トン）、インド（412トン）、インドネシア（328トン）を始めアジア諸国、ＥＵ等からも輸入されている。本年は0.3万トンで前年（0.3万トン）並みであった。

輸出は缶詰と冷凍に分かれるが、缶詰輸出は、サバ缶同様減少の一途を辿っており、本年も12トンで前年（66トン）を下回り、ほぼ皆無に近い状況になってきている。

また、冷凍輸出は国内生産が減少したことを反映し1.4万トンと前年(5.5万トン)を大幅に下回った。

価格は、缶詰が889円（前年（528円））、冷凍原料が97円（前年（75円））で何れも前年をかなり上回った。

消費地入荷量と価格

本年の東京の入荷量も、6.1千トンで引続き前年（6.3千トン）をやや下回った。

本年は産地水揚の減少もあって、消費地への入荷はやや減少した。

価格は、402円で入荷減による価格上昇が目立ち前年（341円）を上回った。家計消費でみると今年は数量減少、購入金額は単価高により増加が目立った。煮干しは、2.2千トンで前年（2.1千トン）をやや上回り、再度増加に転じた。